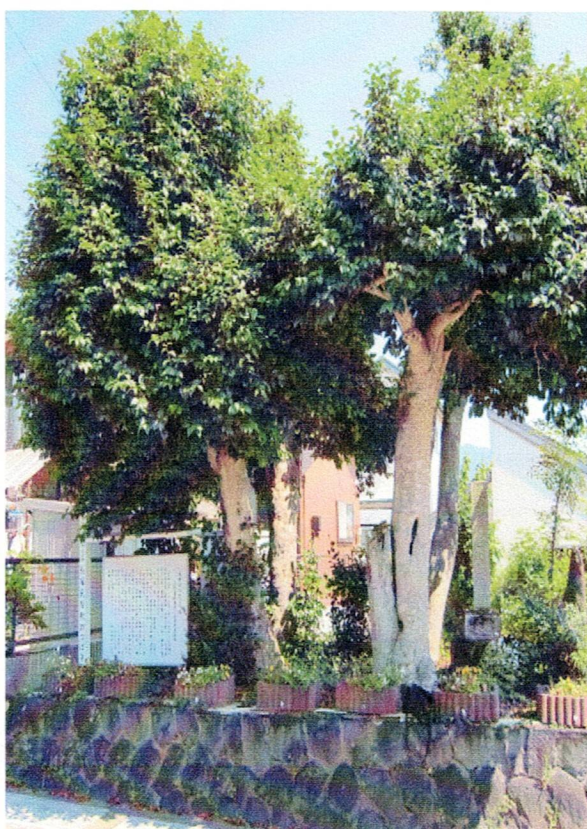


垂井の長屋氏屋敷跡

一 初めに



中山道垂井宿マップで垂井小学校の信号を南に行き少し大きな道路の西に、「重要文化財史跡 長屋氏屋敷の跡」という石碑が建っている。横には、樹齢六〇〇年の大椿がある。鎌倉中期から戦国時代にかけて、垂井周辺を支配していた「長屋氏」と呼ぶ豪族がいたと言われている。長屋氏とはどんな人物か、垂井の領主は誰なのか。さらに、今須の「長江氏」との関係を知りたくて調べることにする。

二 長屋氏屋敷跡



岐阜県中世城館総合調査報告書の長屋氏屋敷跡（垂井城跡）の項に次のように書いてある。場所は南宮鳥居の西、「長屋氏屋敷の跡」の石碑を中心とする東西一四〇m、南北七〇〜一〇〇mの範囲。北は中山道垂井宿、相川、西に支流の前川が流れている。長屋氏屋敷一帯の東にある専精寺辺りに垂井城の推定地と伝わっている。

この横に次のような石碑文がある。

鎌倉権五郎平景政七世之孫長屋小四郎景頼兼久之乱自相州夫濃州宗秀宗房景家景国景木以景元景教将監景重至天文九世住足并此所即其舊地也今敷地一町三反歩裏の碑文 天明八戊申九月十五日 建立

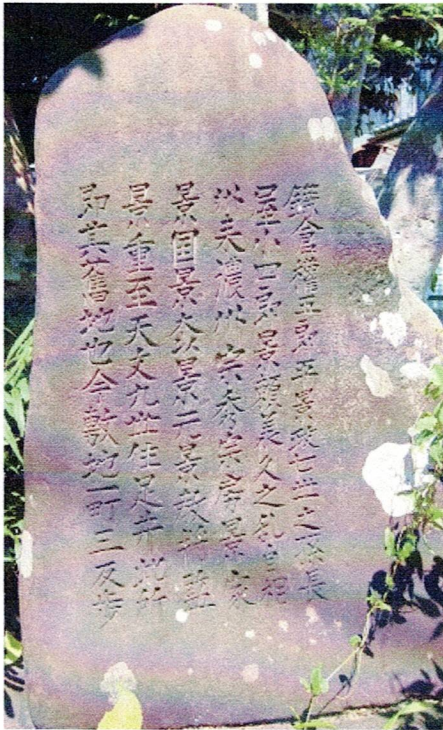
注 碑文の漢字では、兼久之乱は承久之乱。相州は相模国。景木は景森。足井は垂井。舊地は旧土地である。

三 碑文の解説

長屋氏の祖は源義家に従い、後三年の役（一〇八三〜八七年）に勇名を挙げた鎌倉権五郎平景政とある。

美濃明細記によると、七世の孫とは、順に①景政―景継―②義景―④明義―胤明―⑤長屋行景―⑥景頼のことである。

さらに、長屋氏屋敷に住んでいたのは長江③師景の弟④明義の孫⑤行景が長屋と改姓し、その子⑥景頼が最初である。その後、七郎⑦宗秀―二郎兵衛宗房―伯耆守景家―掃部助景国（後隼人佐）―淡路守景森（將軍義教に仕える）―⑧小四郎景元（土岐政房に属する）―太郎右衛門⑨景教―将監⑩景重と天文（一五三二〜五五）まで九代垂井領主として住む。長屋氏屋敷の敷地面積は一町三反歩とある。碑文の裏には、天明八戊申九月十五建立とあり、江戸時代中期一七八八年の石碑となる。



四 長江・長屋氏一族

①平安時代後期に活躍した桓武平氏の流れをくむ武将（平良文・五代後の孫）。長屋氏の祖は源義家に従い、後三年の役（一〇八三〜八七年）に勇名を挙げた鎌倉権五郎平①景政と伝える。

②景政の孫長江四郎左衛門②義景は相模国三浦郡長江村に住み、長江太郎を称する。また、源頼朝から同村に「地頭」に任ぜられたと思われる。

③義景の長男長江八郎③師景の子③秀景が居益（今須）に来て、今須長江氏の祖となる。

④義景の二男④明義の子④胤明（たねあき）は承久の乱（一二二一年）の戦功により、相模国長屋を領する。

⑤胤明の子が初めて、長屋弥七郎⑤行景と名乗り、同氏の祖となる。

⑥行景の子長屋小四郎⑥景頼が相模国から美濃国に来住し本巣郡長屋に住み、次に、不破郡垂井に移住したと伝わる。以後、代々垂井に住んでいる。このとき、一緒に美濃に来た③秀景は今須に住む。

⑦景頼の子⑦宗秀は美濃国守護土岐氏に属しながら、將軍に仕えたとされる。宗秀―宗房―伯耆守景家―景国と続く。

次の淡路守⑦景森は將軍足利義教（室町幕府代六代將軍一四二九〜四一年）に仕え、嘉吉年間（一四四一〜一四四四年）京都に住む。景森は景盛・益景とも言う。

⑧景森の子⑧景元は土岐氏九代守護土岐政房(一四九五〜一五一九)に仕え、垂井に住む。景元は明応四年(一四九五)、美濃の応仁の乱と呼ばれる舟田合戦で戦死。

⑨景元の長男⑨景教の子⑨景興は、垂井より赤坂を切り取り揖斐郡相羽城に移り、土岐氏に属して二万石を領有する。天文十六年(一五四七)土岐頼芸が没落しても斎藤道三に従わず、攻められ、同年十二月相羽城の⑨景興・⑨景直父子は戦死する。なお、妙心寺蔵墓碑覚書によれば、このとき景直は戦死し、景興は逃れて木曾屋(揖斐郡谷汲村横蔵)に逃れ、そこで没し、石碑は今須に建てられたとある。

⑩景教の弟上総守⑩重景は大野郡更地城主で、天文年間武儀郡に移封される。天文十一年(一五四二)八月、斎藤道三が守護土岐頼芸の拠る大桑城を攻めたとき、重景は頼芸の麾下にあり討死する。

⑪重景の子信濃守⑪道重は板取城主として牧七郷を領し、斎藤義龍・龍興に仕える。弘治二年(一五五六)斎藤道三と義龍父子が戦った長良川合戦のときは、義龍の麾下として戦う。

⑫道重の子将監⑫景重は道三に攻められて戦死した相羽城主⑨景興の子で⑪道重の養子になっている。天正十年(一五八二)、景重は豊臣秀吉に気脈を通じ、織田信孝方の郡上八幡城主遠藤氏に攻められ降伏する。

⑬鎌倉時代から戦国時代にかけて、美濃国不破郡に勢力を有した長屋一族の中で、永禄元年(一五五八)に垂井領主長屋

将監景重(後の板取田口城主)の子として生まれた長屋喜蔵がいる。織田信長が斎藤家を滅ぼし美濃を治めると、幼い喜蔵は織田へ人質に出される。織田家で幼い喜蔵の面倒をみたのが金森長近で喜蔵にとつて長近は武将としての教育を教える先生でもあり親でもあったと。その後、長近に従軍して戦功を上げ武将として成長していく。その後、本能寺の変で長近の嫡男、長則が討死して跡取りがいなくなると金森家の養子に迎えられ出雲守⑬金森可重(ありしげ・よししげ・飛騨国高山藩二代藩主)となる。

慶長五年の関ヶ原の戦いでは東軍に付き、養父長近とともに上杉征伐に参加する。また、家康の命で急遽江戸から飛騨に戻り、西軍の稲葉貞通が籠城する郡上八幡城を岳父の遠藤慶隆(娘は可重の正室)と共に攻める。後、養父に合流し、本戦に参加し石田三成勢などと戦う。

⑭道重の叔父⑭正重は揖斐五郎光親に仕え、天文十六年長井氏の麾下に属し、長良川合戦には義龍の麾下で働く。

⑮正重の子⑮正義は福島正則に仕え関ヶ原の戦いに従軍、のち大坂冬の陣で討死する。

⑯正義の弟⑯長政は斎藤義龍・龍興に仕え、永禄十年(一五六七)稲葉山城の落城後、木田郷に塾居、のち織田氏に仕える。

⑰長政の子⑰正隆は岐阜城主織田秀信に仕え、関ヶ原合戦で秀信が滅ぶと、帰農する。

⑱道重の実子で景重の義弟となる⑳定重は武儀郡板取白谷城主、斎藤義龍・龍興に仕え、その後落城後織田信長に仕える。しかし、信長の怒りをかい和泉に逃れ、後に藤堂高虎に仕える。

五 補足

○承久の乱

承久三年（一二二二）五月朝廷方が、後鳥羽上皇を中心に、皇権回復を目的として討幕の兵をあげ、鎌倉幕府軍に鎮圧された戦い。この戦いの推移は次のようである。

五月十五日 後鳥羽上皇、北条義時追討の院宣を出す。

五月二十一日 北条義時、息子泰時に出陣の命を下す。

五月二十五日 鎌倉幕府軍、全軍を三路（東海道・東山道・北陸道）に分けて進軍。

六月三日 上皇軍、防衛のため軍を派遣。

六月五日 大井戸渡で戦闘。幕府軍の勝利。

六月六日 大豆戸（まめど）渡で最大の激戦。幕府軍の勝利。幕府軍、墨俣に到着。ここでも戦端がある。

六月七日 東海道・東山道の軍勢が野上宿に至る。

上皇軍、不破関付近を守るも敗走する。

六月八日 北陸道の幕府軍が越中で上皇軍を破る。

上皇側が、比叡山に避難。延暦寺の兵を頼るが拒否される。

上皇軍、各地で敗走が続く。

六月十四日 幕府軍、宇治川の戦いで勝利。

六月十五日 後鳥羽上皇、北条泰時に勅使を送り、終戦。幕府軍、六波羅に入る。

○長江氏と今須館城の領主

長江氏は承久の乱後、相模国から美濃国不破郡今須村に移住する。その祖は源義家に従い、後三年の役に勇名をあげた鎌倉権五郎平①景政と伝わる。景政の孫②義景は相模国三浦郡長江村に住み、長江太郎を称したことに始まる。義景は、三浦一族とともに源頼朝の挙兵に参加し、鎌倉幕府創建の功臣となる。長江③秀景は承久の乱後に相州から美濃国不破郡今須に住み、今須村長江氏の祖と言われ、今須城（館城）の築城者となる。場所は妙応寺の辺りと伝わる。その後、頼景―景助―重景―備中守高景―長江孫次郎景次と今須郷の領主として約二百数十年にわたり勢力を保つ。

備中守高景は、美濃守護土岐氏の守護代富島氏と外戚関係により跡を継ぐ（養子ともいう）。富島氏は斎藤氏と並んで土岐家中とともに権勢を有しており、高景が富島氏の跡を承けて守護代に就くと、斎藤・富島両氏の関係は悪化し、文安元年（一四四四）六月に高景は京都の土岐館において斎藤氏に殺害される。

応仁二年（一四六八）十月、土岐氏の家臣斎藤妙椿（みょうちん）の攻撃によって今須城は攻め落とされ、重景の子である兄弟景秀・元景（一説には景秀の子）と高景の子景次らは討死し、一族離散となる。正平十五年（一二六六）、当

時の今須城主長江重景が母である妙応尼の菩提寺を弔う為、妙応寺を建立している。



○後光厳天皇の仮御所と長屋氏屋敷

長屋氏は①鎌倉権五郎平景政の子孫で、②長江太郎義景の時に相模国三浦郡長江村に住み、長江氏を名乗る。④明義の子④胤明は承久の乱の戦功により、相模国長屋を領し、その子⑤行景が長屋氏を称する。行景の子⑥景頼から本巢郡長屋に移り、その後垂井を代々領地とし、美濃守護土岐氏に仕

える。

南北朝時代の文和二(一三五三)年六月十三日、北朝の後光厳天皇は南朝方に京都を奪われ、足利義詮とともに垂井へ避難される。その際、垂井の長者の長屋氏屋敷に逃れ、ここを仮御所とされる。その頃、原、蜂屋らの南朝方がここを襲うと聞いたため美濃国守護土岐頼康の居城、揖斐小島の頓宮へ移られる。後光厳天皇は、八月二十五日に足利尊氏の西上を聞き、土岐頼康の造宮した垂井頓宮へ戻られる。九月三日、尊氏の大軍が垂井に到着し、再び、長屋氏屋敷が宿舎となり、後光厳天皇の仮御所とされる。しかし、尊氏はここで病氣となり京都への還幸は遅れる。十七日に尊氏の病氣は治ったため、天皇を中程にし、義詮が先陣し、尊氏が後陣の隊列をつくり、垂井頓宮を後に京都へ出発する。

注 後光厳天皇の「垂井行在」は諸説あり、場所は不破郡史によると、小字名が今に残ること、地勢的にも立地条件が適している「御所野」と書いてある。

○舟田合戦

明応の頃革手城に住む美濃の守土岐成頼(しげより)は、家督を正室の子政房よりも、側室の子元頼に継がせたいと思い、加納に住む守護代の斉藤利国に計ったが、之を断った。成頼は之を船田城に住む小守護石丸利光に相談し、主家の斉藤家に代わって美濃の国を支配したいという野望があったので、心よく之を引受けた。船

田合戦は、土岐家の相続争いに端を発した戦であったが、美濃の国は、政房を推す斎藤方と、元頼を推す石丸方と二分され、単に美濃ばかりでなく、尾張、伊勢、近江、越前の隣国をも巻き込んで、美濃における応仁の乱とまで言われた大きな戦に発展し、約数万の兵が城田寺を中心に戦った、

明応四年（一四九五）七月、正法寺（土岐家菩提寺）の決戦で石丸方が破れ、利光はその居城船田城を焼いて元頼と共に近江の六角氏（成頼の娘婿）のもとへ逃れた。守護元頼は致し方なく、家督を政房に譲り、剃髪して宗安と号して、舎衛寺に隠居した。

その後当寺に於いて、戦いに敗れた父子石丸利光・利元は自害し、土岐元頼も多くの将兵を殺した罪を悔いて自刃し、石丸方の多くの将兵が殉死した。



岐阜市城田寺 舎衛寺にある史蹟船田合戦の地 碑文

當所船田亂土岐元頼方総帥船田城主

石丸利光以下一族將卒陣歿最期地也

○相羽城

鎌倉時代初期に土岐光俊によって築かれたと云われて、一時廃城となっていたが、天文初期に⑨長屋景興が不破郡垂井よりこの城に移り、美濃守護土岐頼芸に属する。天文十六年、斎藤道三は、守護代土岐頼芸の大桑城を攻め、この時⑨長屋景興の守る相羽城も道三に攻められ落城する。

○美濃国守護の年代

*土岐光衝（平安末期から鎌倉時代初期にかけての武将。美濃源氏嫡流である土岐氏の祖）

*土岐光行（鎌倉前期の武将・御家人。二代当主）

*土岐光定（鎌倉後期の武将。土岐光行の五男）

①土岐頼貞 1336年～1339年

②土岐頼遠 1342年

- ③土岐頼康 〓 1387年
- ④土岐康行 〓 1389年
- ⑤土岐頼世 1390年〓 1394年
- ⑥土岐頼益 1395年〓 1414年
- ⑦土岐持益 1422年〓 1465年
- ⑧土岐成頼 1468年〓 1495年
- ⑨土岐政房 〓 1519年
- ⑩土岐頼武 〓 1536年
- ⑪土岐頼芸 〓 1546年
- ⑫土岐頼純 〓 1547年没
- ⑬土岐頼芸 〓 1552年没落

○ 八重垣神社

文和二年(一二三三)八月二十八日に後光厳天皇が祇園社の祭神を迎えて祈願された勅願の宮です。

天文元年(一五三二)垂井城主⑫長屋景重が現在地に社地社殿を寄進し牛頭(ごず)天王社を遷宮する。

明治の初めに牛頭天王社を八重垣神社と改称し垂井の氏神として崇敬される。

六 終わりに

桓武平良文の分流鎌倉氏族である①鎌倉権五郎平景政は後三年の役(一〇八三〓八七年)に勇名を挙げている。

承久三年(一二二二)、長江一族は承久の乱で功を挙げ、美濃国今須・垂井に所領を得て、②義景の孫である③秀景は

今須へ移住する。また、①景政から七代孫⑥景頼が承久の乱戦自ら相州から美濃国垂井に住む。その後、天文年間まで九代屋敷内で垂井の領主となっている。長屋屋敷の広さは一町三反の広さがあり、垂井城はこの東端に築かれていたと思われる。また、江戸時代中期一七八八年の石碑は一体誰が建立したか刻んでいない。

鎌倉時代から垂井の長屋氏屋敷にいた長屋一族と今須館城にいた長江一族の歴史を知ることができたことは有意義で、家系の奥深さに感慨深いものを感じる。特に、飛騨国高山藩二代藩主金森可重が垂井城主長屋将監景重(後の板取田口城主)の子として生まれたことは思わぬ発見である。

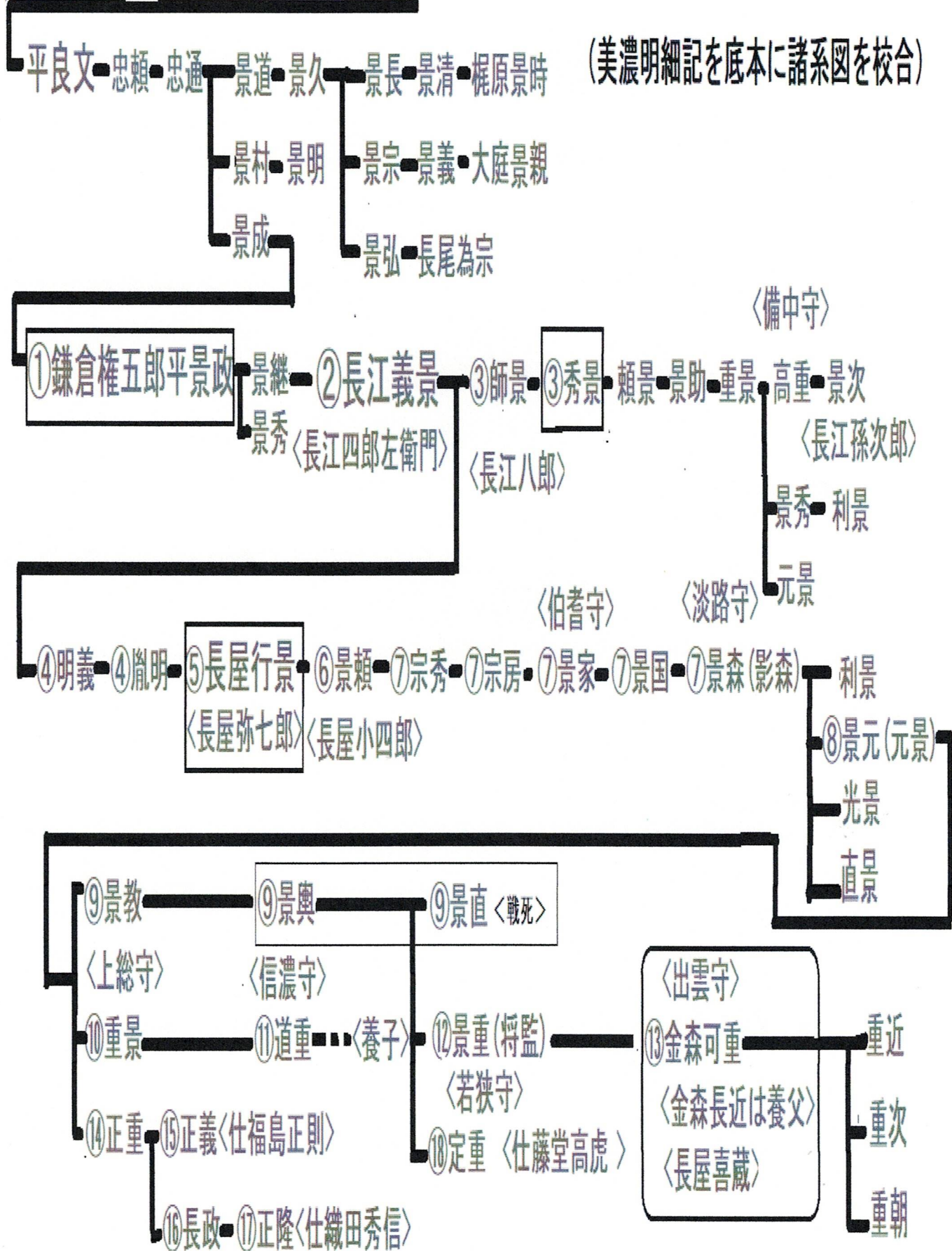
七 参考文献

- ①「美濃明細記」を昭和七年に間宮宗好・伊東実臣氏が著した復刻版(一信出版社)を国会図書館デジタルコレクション
- ②承久の乱の舞台地 岐阜ゆかりの地 岐阜県発行
- ③垂井町史通史編
- ④美濃明細記の人物長江・長屋氏から
- ⑤地方別武将の家紋・系譜(インターネットから)

桓武天皇 737-806
 葛原親王 かずわら
 高見親王 たかみ
 高望王 たかもち

長江氏・長屋氏の家系図

(美濃明細記を底本に諸系図を校合)



垂井の長屋氏まとめ (桓武平氏良文流鎌倉氏族)

その祖は源義家(頼朝の曾祖父)に従い、後3年の役(1083~86 清原一族の内乱)に勇名をあげた①鎌倉権五郎景政と伝える。景政の孫②義景は相模国三浦郡長江村に住して、長江太郎を称した。その③長男師景(のりかげ)は今須村長江氏の祖となり、二男④明義の子④胤明は承久の乱の戦功により、相模国長屋を領し、その子⑤行景が長屋氏を称した。

⑤行景の子⑥景頼が相模国から美濃国に来住し本巢郡長屋に住し、ついで、不破郡垂井に移住したと伝える。以後、代々垂井に住したて美濃守護土岐氏に属した。

⑧景元は土岐政頼に仕え、明応四年(1495)、美濃の応仁の乱と呼ばれる舟田合戦で戦死した。⑨景教の長男⑨景興は、垂井より赤坂を切り取り揖斐郡相羽城に移り、相羽城に拠(よ)った。この頃、長屋氏の知行は2万石余であったという。天文16年(1547)12月斎藤道三に攻められて、父子ともに滅亡した。

⑨景教の弟⑩重景は大野郡更地(さらじ)城主で、天文年間武儀郡に移封された。天文11年(1542)8月、斎藤道三が守護土岐頼芸の拠る大桑城を攻めたとき、⑩重景は頼芸の麾下にあった討死した。その子⑪道重は板取城主として牧七郷を領した。斎藤義龍・龍興に仕え、弘治2年(1556)、斎藤道三と義龍父子が戦った長良川合戦には、義龍の麾下として戦った。

⑪道重の子⑫景重は道三に攻められて死んだ相羽城主⑩景興の子で、養子となったものである。天正10年(1582)、豊臣秀吉に気脈を通じ、織田信孝方の郡上八幡城主遠藤氏に攻められ降伏した。その後、文禄3年(1594)上有知の佐藤方政に攻められ飛騨国増島城(金森可重が初代藩主)に逃れ、⑬金森可重を頼んだ。このとき、養父の道重は門原村で討死した。

ところで⑬金森可重は⑫景重の子で、金森長近に仕えて、しばしば戦功を挙げ、それを長近に見込まれて養子となったものという。

長屋氏一族は、戦国時代斎藤氏に仕えた。⑪道重の叔父⑭正重は揖斐五郎光親に仕えて、天文16年(1547)長井氏の麾下に属して朝倉義景の軍と奈礼(なだれ)坂に戦い、長良川合戦には義龍の麾下で働いた。その子⑮正義は福島正則に仕え関ヶ原の合戦に従軍、のち大坂冬の陣で討死にした。その弟⑯長政は義龍・龍興に仕え、永禄10年(1567)稲葉山城の落城後、木田郷に蟄居、のち織田氏に仕えた。その子⑰正隆は岐阜城主織田秀信に仕え、関ヶ原の合戦で秀信が滅ぶと、帰農した。

⑪道重の実子で⑫景重の義弟となる⑱定重は武儀郡板取白谷城主、斎藤義龍・龍興に仕え、その没落後織田信長に仕えた。しかし、信長の怒りを買って和泉に逃れ、後藤堂高虎に仕えたという。

鎌倉時代から戦国時代にかけて、美濃国不破郡に勢力を有した長屋氏であったが、養子となって金森氏を継いだ可重を除けば、大名家として、あるいは徳川旗本家として残ることはできなかった。しかし、金森氏も江戸時代中期に罪を被って所領没収、子孫は大名の列から外れた。まさに、家が興るも滅びるも「一定の夢の如く」といったところか。

今須の**長江氏**まとめ(桓武平氏良文流鎌倉氏族)

承久の乱後、相模国から美濃国不破郡今須村に移住した。その祖は源義家（頼朝の曾祖父）に従い、後三年の役に勇名をあげた①鎌倉権五郎景政と伝える。①景政の孫②義景は相模国三浦郡長江村に住して、長江太郎を称したことに始まる。②義景は、三浦氏とともに源頼朝の挙兵に参加し、鎌倉幕府創建の功臣となった。また、藤原泰衡（奥州藤原氏第4代最後の当主）討伐にも従軍し、その戦功により戦後、奥州桃生（ものう）郡の深谷保（ふかほ）郷も受領した。

系図によれば、長江頼景は不破郡居益の松尾山に城を築き、美濃守護土岐光行の幕下になったという。とはいえ、頼景より景助、重景と代々同地に住したというが、その間の動向は史料がなく、その実態は詳らかではない。ただ、系図には、重景は正平15年（1360）に峨山禅師（能登国總持寺の弟子）を開山として、父母菩提のために妙応寺を建立した。

重景の子備中守高景は、美濃守護土岐氏の守護代富島氏の養子となる。富島氏は斎藤氏と並んでともに権勢を有し、高景は富島氏とは外戚関係にあったことから家を継いだ。

美濃には鎌倉幕府のころより、目代として斎藤氏が勢力を培っていた。土岐氏が美濃守護となり、その下風となりついには土岐氏の家宰（かさい）となった。ところが、土岐氏の守護代である富島氏は、家宰である斎藤氏と権勢を争いその関係は陰悪なものであった。そして、高景が富島氏の養子となって守護代に就くと、ついに斎藤・富島両氏の関係は破裂し、**文安元年(1444)6月、高景は京都の土岐屋形において斎藤氏に殺害された。**

富島一族はただちに斎藤を討ち、美濃に帰り斎藤氏の本拠を突かんとして、近江勢の応援を得て美濃に入り垂井に達した。美濃の土岐・斎藤氏の兵もまた、これを迎え撃つために西進してきて、不破郡垂井に於いて両軍は激突した。その結果、土岐・斎藤氏の兵は敗れ36人が戦死をした。このとき、今須の長江氏は高景の一族でもあり、富島氏の主力として奮戦した。

以後、20余年両勢力は西濃の地で争い、衝突を繰り返した。しかし、応仁2年（1468）10月、土岐方の名将斎藤妙椿（みょうちん：法名）（美濃国守護土岐成頼の守護代）の今須攻撃によって、ついに富島・長江両氏は敗れて、高景を始め景秀・元景・景次らは討死し、一族離散の憂き目となった。

その後、長江景隆は織田氏に仕え、その子の半之丞は蜂須賀家政に仕えて阿波に移り、子孫は徳島藩士として続いたという。

注：目代 平安・鎌倉時代の国守の代理人。国守の代わりに任国に赴いて執務する私的な代官。室町時代以降、代官のこと。

遙任国司は、自分の一族などを代理人として現地へ派遣し、在庁官人の監督に当たらせた。この代理人が目代である。

中原康富の日記「康富記」文安元年（1444）6月19日条

富島氏と斎藤氏との覇権争いに起因する武力衝突を伝えた記事がある。

後聞、美濃守守護代戸（富）嶋、去十九日、於土岐屋形被謀之、其一族従類等率近江勢、今日打入美濃、焼佛垂水（井）、討取守護方勢三十六人云々、土岐一族四人被討云々

中原康富（1400頃-57）の日記。朝廷、室町幕府の動向、公家社会や自己の生活の有様を詳細に記録している。政治、経済、社会、文化にわたり当時の状況を知るための重要史料である。